子どもとの出会いの中で学ぶこと ①

水沼昭子

「ファッキューン」「ファッキューン」……ブロックを手にM子が、私、目掛けて走って来た。はじめの内は、この「ファッキューン」が何であるのか気づかずにM子の動作をただ見つめていた。その私の姿勢にM子は、「オヤッ?」といった眼差しを向け、続いていたずらっぽく又「ファッキューン」と手を伸ばして私を狙う動作をした。その時はじめてM子の手のブロックがピストルで、私は狙われ射たれるのだと感じ、その場に倒れた。倒れながら「ファッキューン」はピストルの発射音だと了解した。そして同時に「いよいよ、始まった」と思った。M子は自分のイメージ通り狙った相手が倒れたのを見て、くるりと後を向いて自分の部屋へ駆込んでいった。その後姿が解放的で柔らかく感じられた。

M子はそれまでほとんど動こうとはしない子であった。入園して数ヶ月がたって、どの子も園生活のいろいろな場面に慣れはじめ、保育者との関わりを基盤にして、友だちの中に出て行く様になってもM子はテラスや部屋で動こうとはしなかった。遊びに誘い込みたい気持を押えながらM子のまわりで保育者も楽しく、遊んでみせた。そうした場面の中で全身を堅くして、まるでM子の周囲に見えない壁があるかのようだった。この壁を保育者が破くか、M子が破いて出てくるか——。私達は保育後のミーティングで話し合って後者をとり、〝待つ〟ことにした。M子から働きかけてくる事を信じて〝待つ〟ことにした。

そうしたプロセスがあっての「ファッキューン」であったから、倒れながら「いよいよはじまった」と思ったのである。M子が自分から堅い壁を破いて私達の側へ働きかけて来たのだ。もっぱら「ファッキューン」だけではあったが、はじめて私を倒した日以来、だんだん行動範囲が広くなっていっ

た。狙われるのは、まだ保育者だけであったが――。このような状況を保育者達は全員で受けとめることにした。「Mちゃんに狙われたら射れて倒れてやろう」と申し合わせた。テラスや部屋、ホールで保育者達は射れ倒れた。第三者が見たなら喜劇かもしれない。反対に非教育的だと批判を受けるかもしれない。しかし私達は、M子の、その時の働きかけをしっかり受けとめたかった。M子の行動を共感したかった。なぜなら、一人一人の子どもが、仲間を集団と意識し、近づいてくる方法は種々あってそれぞれ異なる。そのやり方をまず受けとめるところから出発させたいと願うから「ファッキューン」と受けてやりたいと思った。

M子の場合、周囲のおとなが、どう彼女に近づこうかと緊張してしまうほど、いわば大人側にとって〝つきあいにくい子〟であった。そのM子がいたずらっぽく相手をみつめ、「ファッキューン」と弱々しい声でピストルを向けてくる。この一発を全身で受けとめてやりたい。やらなければならないと思った。そして、M子のこの働きかけが、それまで全身を堅くしてテラスや部屋で立ち続けながらも、周囲の子ども達の遊びを受けとめ、共感し、やがて自分の力にして、外側へ向けて来たことを思う時「あなたはどうして遊ばないの」と咎めずに〝待つ〟ことを選んで良かったと思う。

M子の「ファッキューン」が「せんせいあそぼ！」と聞えて来る。次はどうM子の遊びを広げようか……と逸る気持を押えて、まずはM子の今の心もちに私の心をあずけて行きたい。

一人一人の子どもの心もちを受けとめるにはあまりにも保育者として小さい自分を思う。子ども達の投げかけてくる心もちが、サインが何であるか理解できずに、ただただ悩んだりまよったりする時、その悩み、まよいを心に留めて、したすら、子ども達の生活の中で答えを求めるだけである。「あのサインは、このことだったのか」と子ども達の行動が、働きかけが教えてくれる。そのことを感じとれる心を持ち続けたいと思う。

M子のピストルが、保育者としての私の心の大事な部分に狙いを定めてくれた。次は、どの様なサインを投げかけてくるのか。M子の毎日を受けとめて行きたい。

（千葉・愛隣幼稚園）